



半世紀前の 更級地区

今から約50年前の1960年代前半と考えられる更級地区の航空写真です。上が南下が北。若宮、芝原両区は残念ながら写っていません。中央やや右下に木造の更級小学校、中央から右下には畑の中を明治新道がまっすぐ走っています。掛かったばかりの冠着橋の姿も、羽尾4区の郷土史家、北村主計さんをお持ちの写真をお借りしました。

役員で双子塚古墳の草刈り



羽尾地区と代地区の境付近に二つ並んだ古墳があり、双子塚古墳と呼ばれています。

北側の1号墳は、直径10m、高さ2mほどの円墳で、裾の一部を道路で削られているほか、墳丘に数ヶ所の窪みが見られます。南側の2号墳は直径4m、高さ1.3mの小円墳で、保存状態は良好です。いずれの古墳も6世紀以降の古墳と考えられています。

更級地域の貴重な文化財である、この

双子塚古墳を保存し後世に残して行くため、友の会が千曲市歴史文化財センターから管理の依頼を受け、毎年役員の方々が草刈り作業を行っています。今年度は、5月、7月、8月の3回実施しました。暑い中作業いただいた皆さま、ご苦労さまでした。

(さらしなの里友の会事務局)

縄文まつり

今年も中止

いまだ終息の兆しが見えない新型コロナウイルス感染症により感染力の強い変異株も現れていることから、7月17日の実行委員会では今年度の縄文まつり開催の可否について協議しました。

その結果、会場内での十分な感染対策を講じることが難しく、参加者の安全が確実に担保できる状況にないことから、やむなく中止する判断をいたしました。



昨年(友の会事務局)

リレー里麗エッセイ

姨捨山 爺捨山

千曲市若宮 水井けい子

昨年、世界遺産の青森県白神山をトレッキングしたときです。ガイドのおじさんは同世代で、客は私たちが夫婦だけでした。帰りのバスの中、「長野は姨捨山がありました。実際あったのか、人骨は出たのかね」とおじさんが言います。

私は語り部の仲間と姨捨駅で姨捨伝説を語りしてもらったことがあります。親孝行息子と賢い母の話であることを説明すると、語ってほしいというので

「なあ多平や、いつまでも、ぐだて、お父が年取ったとき乗せてくるもの」と答える。その言葉を聞いた息子は「いれ爺と同じ身になるのを知って切なくなつて、爺を連れて戻つた」という話で、これはこれで胸に落ちました。

「野尻湖へガイド研修に行くから、姨捨の景色眺めに行くかな」再会を楽しみにしています。岩手には昔、年寄りだけで自給自足の暮らしをしたデンデラの里遺跡があるそうです。それもいいな、畑仕事に行くかと、腰を上げました。

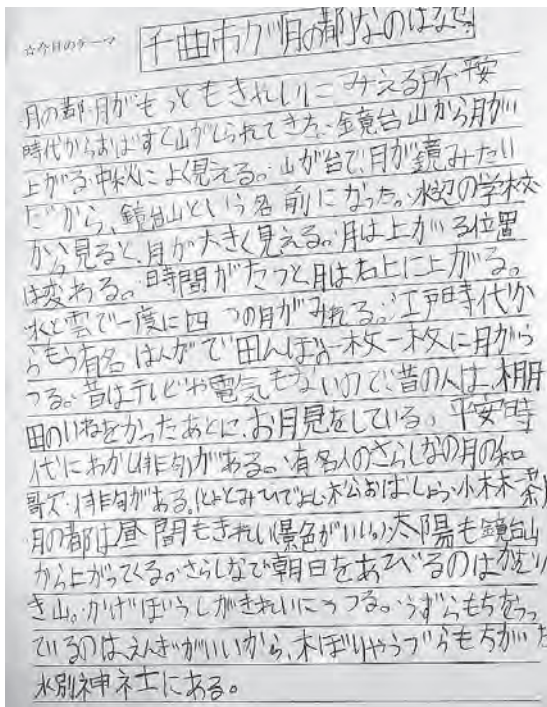
「60歳になった爺が、息子と孫に担がれて山へ行った。爺を捨てて戻ろうとすると、孫がもつこと棒を持っていった。「そんな物投げろ、いらね」と言うと、孫は「んだて、お父が年取ったとき乗せてくるもの」と答える。その言葉を聞いた息子は「いれ爺と同じ身になるのを知って切なくなつて、爺を連れて戻つた」という話で、これはこれで胸に落ちました。



世界遺産白神「十二湖トレッキング」のガイド、西口正司さん(右)と

月の都 出前授業始まる

- ・千曲市はなぜ「月の都」？
- ・棚田はどのようにできた？
- ・「田毎の月」って何？



昨年6月、千曲市が「月の都」として日本遺産に認定されたのを受け、さらしなルネサンスは、小中学校への出前授業に取り組んでいます。ルネサンスのメンバーには地学や文学、芸術、自然などさまざまな分野に精通した人たちがいます。会の発足時から「月の都・千年文化再発見の里づくり」をスローガンにして、研究成果も集まっていますので、子どもに届く企画を考えました。

スマホ、アニメ大好き世代の子どもには、写真やイラストをたくさん載せたスライドを見てもらいながら話をするのが一番いいと、メンバーの元先生からアドバイスがあり、会ではパソコンのパワーポイントと呼ばれるスライドを映し出すシステムを使い、授業プログラムの開発を行っています。

これまでに「千曲市はなぜ月の都なのか」「姨捨の棚田はどのようにできたのか」「田毎の月って本当にみられるのか」という3テーマでのプログラムが出来上がりました。いずれも大体30分くらい。聞いてもらおう学年に応じて、短くしたり長くしたりすることが出来ます。



屋代中学校では8月30日、1学年を対象に授業を行いました。

新型コロナウイルスの感染が拡大傾向にあったため、インターネット回線を使ったオンライン授業。地域を学ぶ総合学習の日で、1年生は午前には地元の里山、一重山の学習をした後、「千曲市はなぜ月の都なのか」をテーマに設定することになりました。

さらしなルネサンスは、別のテーマでも子どもが身近に感じて誇りが持てるような授業作りをしています。3テーマについてはYouTubeのサイトで「月の都」で検索するとご覧になります。

(芝原区・大谷善邦)

屋代駅前のお月見をしながら、平安時代におかみ月見がある。有名なさらしな月の歌で、月見がある。さらしな朝日をおぼえるのは、さらしな山。さらしな朝日をおぼえるのは、さらしな山。さらしな朝日をおぼえるのは、さらしな山。さらしな朝日をおぼえるのは、さらしな山。

屋代駅前のお月見をしながら、平安時代におかみ月見がある。有名なさらしな月の歌で、月見がある。さらしな朝日をおぼえるのは、さらしな山。さらしな朝日をおぼえるのは、さらしな山。さらしな朝日をおぼえるのは、さらしな山。

友の会だより前号(44号)で、芝原・仙石両区の境界にある「堂の山」の里山復活プロジェクトを特集しましたが、今号では堂の山に現れる鳥について、プロジェクトメンバーで日本野鳥の会長野支部会員の高木眞さんに寄稿してもらいました。鳥の画像は、高木さんが撮った写真を加工するなどしたものです。

堂の山の復活プロジェクトに参加し、整備作業のかたわら、この付近の野鳥の出現を観察してきました。整備を始めた2021年1月から8月までに、遠くからの声や通過しただけのものを含めて53種類を確認しました。

この中で、冬季の代表種として、カシラダカ、ジョウビタキ、オオタカを紹介いたします。

カシラダカ(頭高)は、秋から初冬にかけて越冬のためユーラシア大陸から日本列島などに渡って来ます。大きさがスズメくらいで、遠目では色も似ているのでスズメだと思われるかもしれませんが、堂の山では数十羽ほどの群れが果樹園の地面で草の種をついばみ、人が近づくと一斉に飛び立ちます。餌を食べる場所と隠れる

整備進み訪れ活発に



カシラダカ

ためのまとまった木立が必要な様子で、堂の山付近は最適な環境のようです。(4月下旬ごろまで)

ジョウビタキ(尉鷄)は、中国東北部、沿海州などから冬季に日本列島にも渡ってきます。オスの体には銀白色、オレンジ色、黒や



ジョウビタキ

濃紺といろいろな色があり、美しい鳥です。木の実を求めて人家の庭に来ることもあります。スズメよりやや小ぶりで群れることはなく、堂の山では林縁部、果樹園の支柱のてっぺんなどで「ヒツヒツ」と鳴きながら尾を振る姿を見かけます。(4月の下旬ごろまで)

オオタカ(蒼鷹/大鷹)は、カラスほどの大きさの猛禽類です。主に小型の鳥やキジ、カモなどの中大型の鳥を獲ってくらしています。

1980年代は絶滅のおそれも指摘されていましたが、保護政策により数が回復し、2017年には、国内希少野生動植物種から解



オオタカ

除されました。増えたとはいえず少種であることは変わりなく、堂の山付近の自然環境が豊かであることの指標になりました。

堂の山では、今年の冬から春にかけて、かなりの頻度で堂の山上空を飛翔する姿を観察できました。真冬から早春にかけてよく晴れた日の決まって午前10時半ごろから姿を現しました。地表が温まり上昇気流が発生するからではないでしょうか。6月26日には林の中でけたたましいオオタカの声を聞きました。堂の山付近を年間通して利用していると思われるかもしれませんが、冬が一番観察しやすい時期です。

堂の山では、山道の整備により旧リンゴ園跡に明るく広い草地ができました。この環境の変化により野鳥の訪れがいつそう活発になりそうです。どんな野鳥が訪れるかこの冬が楽しみです。

(高木眞・千曲市桑原)

編集後記 今号のトップページは趣向を変えました。50年前の姿を見ると、いろいろなことを語りだしたくなります。まっすぐに走る明治新道。更級保育園にお勤めだった米沢文子さんはこの道を「桃畑街道」と呼んでいたそうです。